

人から人へ, かかわりつなぐ学校図書館

I はじめに

II 本年度の実践

- 1 図書館運営
- 2 読書活動
- 3 情報活用

III 今後の課題と問題点

第19分科会
メディア・リテラシー教育と文化活動
A-2 情報教育、学校図書館

平松 亜弥美 (豊橋・八町小)

研究の概要報告（読書・学校図書館）

第71次教育研究愛知県集会には、10本のレポートが提出され、学校図書館を有効に活用するために各分科会で熱心にとりくんだ実践が報告された。

「読書のよさや価値を自ら見だし、生涯にわたり読書に親しむことができる生徒の育成」「調べ学習に主体的にとりくむ児童の育成」「主体的に図書館とかかわりをもつことができる生徒の育成」などの内容であった。読書の喜びや楽しみを味わわせ、読書意欲の向上をはかる読書指導の実践が報告された。また、自分の課題について主体的に情報を収集し、学校図書館を積極的に活用した調べ学習の実践や、魅力ある新しい学校図書館をめざして、より利用しやすいものにするためのとりくみも報告された。

読書活動においては、読書活動や福祉の授業を通して自己理解や他者理解を促すようにしたり、ブックトークやICT活用、マイブックリストの活用を通して読書に親しみ続けようとする子を育てたりする他、表現を意識して読めるようにする実践、読書のよさや価値を見出す実践などが報告された。読書に親しむ子の育成には、各教科の指導を通してICTを活用しながら活動を工夫するとともに、表現を意識して読みすすめることで生涯に渡り読書に親しむ姿勢を育成することの大切さが確認された。

情報活用については、段階的に場面を設定して身に付けたい力を明確にする実践、小学校低学年の発達に応じて本はもとより映像や体験を通して課題を解決しようとする実践、要約することで情報の内容を理解させる実践が報告された。発達段階に応じて計画的に活動内容や方法を工夫することで情報活用能力の伸長をはかることが確認された。

図書館経営・連携については、学級分館への配架やオンラインを駆使した貸し出しの実施や、朝の読書や読み聞かせ・ブックトーク、外国人生徒のニーズに合わせた図書館づくり等についての実践が報告された。これまでも多くなされてきた学校図書館の環境整備や図書紹介が、外国人を含む皆のためにもなるように、そして、オンライン等ICTを適切に活用することで新しい学校図書館のあり方を模索させていく必要性が確認された。

今後も、伝統的な読書活動や調べ学習に引き続きとりくませるとともに、ICTを活用しながら新しい学校図書館運営や指導の充実をはかり、「読書センター」「学習情報センター」として充実させ、どの子にとっても魅力ある学校図書館運営を期待する。そして、学校図書館の利活用を通して、子どもたちが自ら課題を見付け追求し行動する「生きる力」を身に付け、豊かな人間性を培いながら成長することを願う。

（宮武里衣・榊原有香）

報告書のできるまで

10月16日、愛知県産業労働センターにおいて、県集會が開かれ、「読書・学校図書館」の分科会では、第70次教研までの成果と課題をもとに、子どもたちの心を豊かにする読書教育の推進について活発に討論が繰り広げられた。司會者や教育課程研究委員の適切な支援と、助言者の明確な指導を得ながら、多くの成果を収めることができた。

この報告書は、県集會での提案とその討論の内容をまとめたものである。ここに至るまでに、助言者をはじめ、関係の諸先生方にご指導いただいたことに深い感謝の意を表す。

助言者	宮武 里衣 (美作大学)	榊原有香 (名古屋・吹上小)
教育課程研究委員	福岡 寛也 (豊橋・北部中)	水野 徹 (名古屋・東築地小)
	今井 舞 (尾北・城東中)	岩井 友美子 (名古屋・藤が丘小)
	籙 大貴 (海部・天王中)	遠山 友加里 (一宮・木曾川西小)
	杉本 梢 (豊田・寿恵野小)	白形 奈穂 (岡崎・北中)
	安井 智奈美 (名古屋・明德小)	

I はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものといわれている。テレビ、インターネットなどのさまざまな情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化などにより、子どもの「読書離れ」が指摘される今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせるとともに、読書を通して豊かな心を育てていくことが求められている。

今後ますます情報化がすすむことで、多種多様な情報の中から、自分たちの生活に必要な情報を収集し、何が有効な情報であるかを取捨選択し、課題を解決する力を培うことも必要となってくる。そのためには、「情報・学習センター」としての学校図書館の整備・充実をはかるとともに、自らの課題解決のために情報を収集・選択して活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

また、本を介して意見や感想を交流することで、人と人がつながりを持ち、心を通わせていくことも求められている。子どもの読書量は、学年がすすむにつれて減少してきているのが現状である。子どもたちは日常生活の中で、テレビやゲーム、SNSでのやりとりで夢中になり、人との関係が希薄になってきている。こうした子どもたちに読書による人との間接体験をもたせたり、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人とのかわりの良さを感じさせる上で有効であると考えられる。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は、次の3点であると考えられる。

- 読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
- 友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割
- 利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

地域によって差はあるものの、法律の改正により学校司書の配置がすすめられ、司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。現代社会に生きる子どもたちが、多くの本と出会い、自らの課題を解決することで、現代文化を見つめ直し、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

II 本年度の実践

1 図書館運営

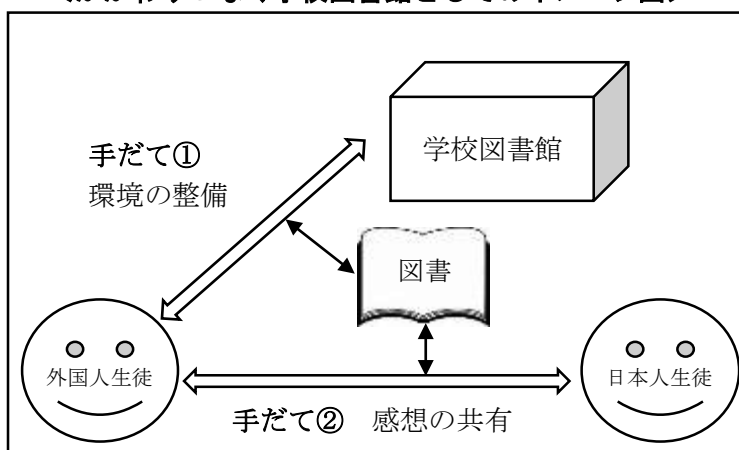
1 はじめに

ユネスコ学校図書館宣言によると、「学校図書館サービスとは、年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語、職業、あるいは社会的身分にかかわらず、学校構成員全員に平等に提供されなければならない。通常の図書館サービスや資料の提供ができない人々に対しては、特別のサービスや資料が提供されなければならない。」とある。

豊橋市立東陽中学校では、令和元年度、全校生徒488人中96人、約2割が外国人生徒(ここでは外国にルーツをもつ日本国籍の生徒も含む)である。昼休みに図書館を利用する生徒は日本人がほとんどで、外国人生徒は数人である。しかし、日本人生徒と外国人生徒とが思い思いに過ごしていることが多い。また、実際に本校に在籍する外国人生徒のうち、52人が言語的サポートを必要とし、国際教室での取り出し授業を行っている。そのような生徒たちにとって、「図書＝難しい」という思いが強く、読書や調べるために図書を手に取ろうとする生徒は少ない。また、毎朝の読書の時間には図書を用意しておらず、時間になると学級文庫の図書を手に取り、眺めて時間を過ごす生徒がほとんどである。

そこで、「外国人生徒も利用しやすい図書館環境を整えることをきっかけに、図書から得られる楽しさやおもしろさ、そして、新しい発見を味わってほしい」「日本人生徒と外国人生徒のかかわりを図書でつないでいきたい」と考え、「人から人へ、かかわりつなぐ学校図書館」をテーマに実践を行うことにした。

<かかわりつなぐ学校図書館としてのイメージ図>



2 研究の構想

(1) 研究の仮説

【仮説Ⅰ】

外国人生徒のニーズや日本語能力に応じた図書の配架や提供をして、日本人生徒だけではなく外国人生徒も利用しやすい環境を整備すれば、誰もが利用しやすい図書館になるだろう。

(手だて①)

【仮説Ⅱ】

読書を通して、その図書の魅力や感想を仲間と共有できる場や機会を設けることで、より図書に親しみをもち、積極的に図書を手に取ることができるようになるだろう。(手だて②)

(2) 研究の手だて

【手だて①】 外国人生徒のニーズや日本語の力に合わせた図書館環境の整備

(外国人生徒と図書館・図書をつなぐ)

- ㊦ポルトガル語・英語による案内表示・ポップの作成・掲示、おすすめ本の紹介
- ㊧外国語図書の配架場所の変更、やさしい日本語図書コーナーの設置
- ㊨国際教室での授業に応じた、やさしい図書資料の提供

【手だて②】生徒間で図書に対する感想を共有するためのキャンペーンの場の設定（生徒どうしのかかわり）

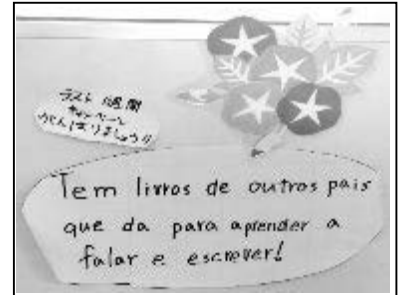
- ・BOOKコメントキャンペーンからコメントリレーキャンペーンへ

3 研究の実践

(1) 【手だて①】外国人生徒のニーズや日本語の力に合わせた図書館環境の整備（外国人生徒と図書館・図書をつなぐ）

㊦ポルトガル語・英語による案内表示・ポップの作成・掲示、おすすめ本の紹介

外国人生徒の図書館への聞き取りによると、図書館に行かない理由として、「わからないから」という回答がいくつかあった。その「わからない」について尋ねてみると、「日本語」「図書館」「図書の楽しさ」など、いろいろな「わからない」が見えてきた。そこで、まず委員会と連携をとり、外国人生徒にもわかりやすい図書館をめざすことにした。



まず、委員会活動の一つとしておすすめ本の紹介文作成を行っている。しかし、図書選びや日本語で書くことに苦戦をする姿が多くあった。そこで、「わかりやすいようにしよう」と図書館環境整備のために紹介文を外国語で作ることを提案すると、意欲的にペンを取り、いきいきと活動に参加するようになった。【資料1】更に、日本人生徒もひらがなで書くなど、外国人生徒に配慮したポップを書くことができた。

【資料1】ポルトガル語でのポップ

外国籍の生徒が、母国語でおすすめ本の紹介文を作成したことで、同じ国出身の生徒たちの興味を引き、図書館にむかうようになった。

また、図書委員にもかかわらず、図書当番の時にしか図書館を訪れなかった外国人生徒が、他生徒がどんな反応を示しているのかを知りたくなり、図書館を頻繁に訪れるようになった。紹介文の作成は、委員会に所属する外国人生徒と図書委員会活動をつなぐきっかけをつくることができた。

㊦外国語図書の配架場所の変更、やさしい日本語図書コーナーの設置

本校の図書施設には、図書館と、その向かいのオープンスペースに「図書コーナー」がある。図書館には読み物資料を中心に配架し、「図書コーナー」には、授業時間中いつでも図書資料を活用できるように調べ学習資料を中心に配架している。図書館には、ポルトガル語や英語で書かれた図書も配架してあったが、その存在を知らない外国人生徒が多くいた。そこで、外国語図書の配架場所を、いつ



【資料2】廊下に配架をした外国語図書

でも手に取ることができる図書館と図書コーナーの間の廊下に設置をした。【資料2】

設置場所を廊下にしたことで図書館が開館している昼休みだけでなく、移動教室の際にも見かけることができるようになった。母国語での図書があることを知った外国人生徒は、そのコーナーから朝読書の図書を選ぶようになった。朝読書の時間に学級文庫の図書を眺めるだけだった外国人生徒が、自ら図書を手に取るようになったことは、日本語能力が低い外国人生徒と図書をつな

ぐ、大きな一歩となったといえる。

日本語を覚え始めた生徒たちは、日本語に対する興味関心や意欲が高く、「日本語を覚えたい」「日本語の本を読めるようになりたい」と考えていることがわかった。そこで、「やさしい日本語図書コーナー」として、図書館の一角に比較的内容のとらえやすい絵本を設置することにした。

今まで本校で配架されていた中学生向け図書とは異なり、絵本ばかりが並んでいることに「懐かしい」「これ読んだよね」と日本人生徒が手に取り始めた。更に、日本人生徒が外国人生徒に「これ知ってる？」と尋ねたり、あらすじを教えたりする姿もみられた。しかし、図書館内で絵本を手に取り、日本人生徒の話を書く外国人生徒はいても、借りて読もうとする外国人生徒はほとんどいなかった。理由を尋ねると「簡単」という意見だけでなく、つたない日本語で「だいじょうぶ。ほかの本」という答えが返ってきた。言語の壁はあっても彼らも同じ中学生であるため、絵本を借りて教室で読むことには抵抗がある様子だった。そこで、彼らの日本語の力に合った選書をするとともに、生徒の自尊心を損なわない手だてを考える必要があると感じた。

9月からは、コーナーの一部に絵本ではなく小学校低学年向けの読み物資料を配架することにした。【資料3】



【資料3】絵本から読み物に替えた「やさしい日本語図書コーナー」

小学校低学年向けの図書は活字が大きく、短編で読みやすい。また、漢字にはふり仮名があることが利点としてあげられる。加えて、絵本とは異なり、表紙の体裁、書籍の大きさは小説などとはほとんど変わらないため、外国人生徒の自尊心を損なわないであろうと考えた。しかし、これらの図書の中には、絵本のように表紙で話の内容や魅力が得られるものばかりではない。そのため、その図書の内容や魅力を伝えるために、日本人生徒が簡単な感想や見どころをポップにして掲示した。



【資料4】簡単な日本語で書かれたポップ

日本人生徒にとって、親しみのある図書が多いため、生徒たちは意欲的にポップを作成した。平易な日本語を使ったりポップの形を工夫したりしたことから、外国人生徒にとって、表紙に代わる新たな魅力となり、手に取るようになった。【資料4】

㊦国際教室での授業に応じた、やさしい図書資料の提供

図書は学習面でも活用でき、知識を補う材料にもなる。そこで、国際教室と連携し、授業の中で図書を取り入れていくことで、図書を利用する機会を増やしたいと考えた。

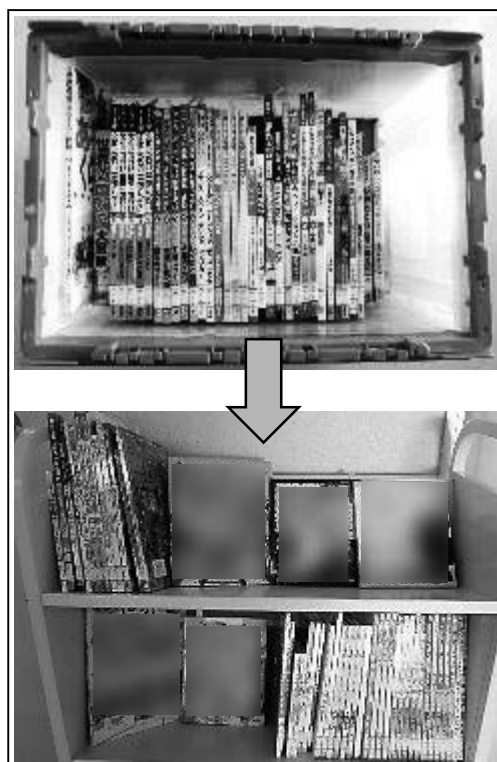
まず、1年生社会の取り出し授業での活用を試みた。学校図書館司書とも協力し、使用する生徒の実態に合った図書を選ぶことを意識した。司書と選んだ図書は、箱に入れて国際教室に設置した。しかし、箱に入れてあることで生徒からは背表紙しか見えず、その本の魅力を感じることができなかつたようで、活用されなかつた。そこで、図書の設置方法を簡易の箱からブックトラックに変え、面出しして配架した。【資料5】この方法に変えたことで、生徒たちはブックトラックに乗っている図書の前に立ち、興味深く表紙を眺めるようになった。

また、国際担当教員と司書教諭とで、学習内容や図書の活用場面を話し合い、選書・配架した。その結果、図書を使って意見を交流するようになり、興味関心が高まり、利用するもの変わった。

しかし、図書の利点でもある豊富な情報が、外国人生徒にとってはマイナスに働く一面がある。日本語を苦手とする外国人生徒にとって、たくさんの情報の中から、必要な情報が書かれているページをすぐにみつけることは難しく、学習面で図書を使うことが負担となっていた。これこそ、「図書＝難しい」につながってしまう要因の一つであるといえる。そこで、調べたい内容をすぐに見つけることができれば、学習面での負担を軽減することができるのではないかと考えた。配架をする際に、国際担当教員から、あらかじめ授業内容を聞き、その授業内容に合う図書のページに付箋を貼ることにした。

【資料5】

付箋を貼ったことで、生徒がそれを目印にページを開き、自分に必要な情報をすぐに見つけることができた。授業で繰り返し活用をしていくことで、休み時間にも本を開いて読み始める生徒も出てきた。



【資料5】面出しした書架



【資料6】付箋を貼った図書

(2) 【手だて②】生徒間で図書に対する感想を共有するためのキャンペーンの場の設定

(生徒どうしのかかわり)

・BOOKコメントキャンペーンからコメントリレーキャンペーンへ

本校は異学年交流が盛んで、年間を通した縦割り活動を多く行っている。その一環で、図書委員会でも団対抗のBOOKコメントキャンペーンを実施した。このキャンペーンを通して、来館者数と貸し出し冊数の増加をめざすとともに、図書館が生徒たちの図書に親しみを感じるきっかけ

けとなったり、外国人生徒と日本人生徒とが図書を介してかかわりを深められたりする場となるようにした。

BOOKコメントキャンペーンでは、まず、借りた図書の感想や見どころをコメントカードに記入した。その後、カードを図書館の壁面にクラスごとに掲示して、その数を競った。7月の3週間をキャンペーン期間とした。壁面に掲示することで、他者の感想が見やすくなるとともに、クラスのコメント数を一目で確認することができた。また、図書室の出入り口付近に掲示したため、生徒たちの興味を引く存在となった。【資料7】

更に、ふだん図書館に足を運ばない生徒が来館する姿も多くみられ、生徒の図書館への興味を引くきっかけとなった。【資料8】実際に、図書の貸し出し数も、昨年度の7月合計である571冊から1231冊となり、2倍以上の増加となった。この「競う」という感覚が「本をもっと手に取ろう」という思いにつながったと考える。一方、「今、うちの団が一番だね。」「もっと、借りないと。」という声が聞こえるようになり、生徒たちは、「競う」ということばかりに意識が向いてしまっていると感じた。生徒の心は、図書の中身を深く味わうというところまで至っていなかった。加えて、外国人生徒にとっては、日本語でコメントを書くことの抵抗感から、キャンペーンへの参加意欲が低下した。

これらの課題を改善するために、「競う」から「発信」に方向を変えたコメントリレーキャンペーンを実施することにした。前述した「やさしい日本語図書コーナー」にある図書や人気のある図書について、生徒たちがコメントを出し合い、つないでいくキャンペーンである。コメントのスタートは図書委員の生徒とし、それぞれの感想を一言コメントとして図書館壁面に掲示した。スタートを図書委員にすることで、簡単な日本語や外国語を使用したコメントを意図的に作成することができた。言語の壁にとらわれず、自由にコメントを発信していこうという手本となった。コメントカードは【資料9】のように吹き出しの形とし、前のコメントの下に次のコメントをつなげて掲示していく方法をとった。生徒にとって親しみの感じられる掲示としたことで、以前の単独のカードよりも、コメントのつながりを感じられるようになった。その掲示を見た他の生徒は、掲示されている図書のコメントに対し、



【資料7】キャンペーンの掲示を見る生徒



【資料8】キャンペーン期間中に
混み合う図書館

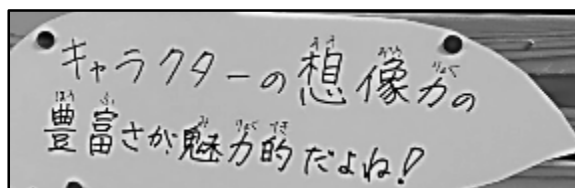


【資料9】コメントリレーキャンペーンの掲示

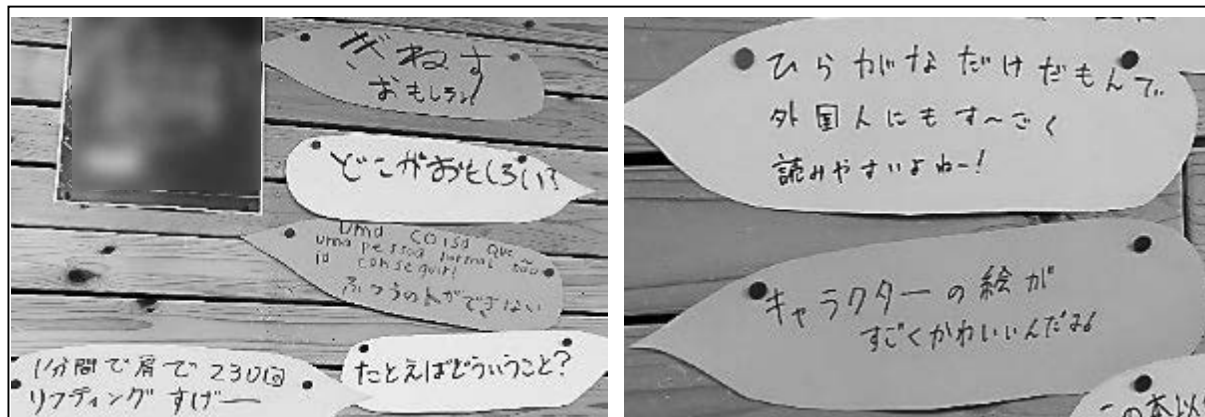
言語の壁にとらわれず、自由にコメントを発信していこうという手本となった。コメントカードは【資料9】のように吹き出しの形とし、前のコメントの下に次のコメントをつなげて掲示していく方法をとった。生徒にとって親しみの感じられる掲示としたことで、以前の単独のカードよりも、コメントのつながりを感じられるようになった。その掲示を見た他の生徒は、掲示されている図書のコメントに対し、

自分のコメントを続けて発信していった。【資料9】

このことから、一冊の図書について、さまざまな見方ができるようになった。「面白かった」「楽しかった」などの表面的な感想から、「キャラクターの想像力の豊富さが魅力的だよね」や「この場面の気持ちに共感できるよね」などの読みの深まりを感じる感想が増えていった。【資料10】また、自分のコメントへの返信が気になり、再度図書館へ向かう生徒の姿もみられた。更に、外国人生徒のコメントも徐々に増え、図書を介した生徒どうしのかかわりが増えた。【資料11】



【資料10】ある絵本に寄せられたコメントの一つ



【資料11】言語の壁を越えたやり取り 外国人生徒に向けたコメント

4 成果と課題

日本人生徒に限らず、外国人生徒にも寄り添う図書館をつかっていくためには、言語力に見合った環境整備や図書の配架方法の工夫が重要であると感じた。廊下や国際教室など、生徒がふだん利用する場所に図書環境を整えたことで、図書館を訪れることが少ない外国人生徒の図書への関心を高めることができ、図書にふれるきっかけとなった。また、中学生向けの図書にこだわらず、生徒の実態に合った図書を学校図書館司書と協力しながら配架・提供したことで、「図書＝難しい」と考えていた外国人生徒の図書利用も増えていった。さらに、図書を通して、生徒どうしがよりかかわりを深めていくことができるように、BOOKコメントキャンペーンやコメントリレーキャンペーンを行った。個人で楽しみ親しむイメージの強かった図書を、生徒たちが感想を共有できるようにしたことで、新たな図書の魅力に気付くきっかけとなった。そして、かかわりの薄かった外国人生徒と日本人生徒が互いに図書を通して思いを伝え合うことにもつながった。実践を通して、外国人生徒にとって図書は「興味・関心のあるもの」から「利用するもの」に変わり、「他者とかわるもの」へと発展させることができた。

多くの生徒が図書館に足を運び、図書を通してかわるようになったが、まだ生徒自身が必要性を感じて図書を活用しようと思う段階までには至っていない。今後は、司書教諭だけではなく、他の教員とも連携をはかり、授業とのつながりをつくっていく必要があると考える。

5 おわりに

今回の実践を通して、言語の壁を越えて生徒どうしがかわる図書館をつかっていくためには、心に寄り添った活動が大切だと実感した。先に述べた、ユネスコ学校図書館宣言にあるように、司書教諭として、国際担当教員だけではなく全職員にも働きかけ、学校全体で誰もが利用し

やすい図書館をつくっていきたいと考えた。

2 読書活動

読書が自分の世界を広げ、自己理解につながることを、ビブリオバトルや本を活用した授業を通して実感させた実践やタブレット端末を利用して、子どもにおすすめ本をプレゼンさせたり、感想交流を促したりした実践、優れた表現をピックアップしたり、伝える相手を明確にしたりしてポップ作成を行った実践や、読書の良さを見だし、生涯に渡って読書に親しむ子どもの育成をめざした実践が報告された。

3 情報活用

辞書引きで語彙を増やし、調べ学習に主体的にとりくむ児童の育成をめざした実践や、思考ツールを用いたワークシートを活用し、情報整理を行わせた実践、リーフレットにまとめる活動を通して、本や資料から必要な事柄を要約できるようにした実践が報告された。

Ⅲ 今後の課題と問題点

本年度の県集会では、読書を通して、自己の考えを広げ、他者への理解を深めようとした実践が報告された。

目的に合った本を選書したり、主体的に情報収集を行い発信する活動を設定したりすることで、子どもが読書に対する価値を見出せる実践が報告された。

さまざまな事情をもつ子どもたちが主体的に図書館にかかわりをもてるように、魅力ある図書館づくりを工夫した実践が報告された。

タブレット端末と本を併用し、子どもたちの主体的なとりくみを促す実践の報告も多くなされた。

情報交換では、教科等での図書館活用について、情報交換を行った。社会科や総合的な学習の時間に行う調べ学習での活用が多かった。その他にも、英語の授業への導入として、英語の絵本を紹介したり、美術の鑑賞の時間にさまざまな作家の画集を用いたりするなど、国語科以外での活用の例が意見として出された。

今後残された課題は、以下の三点である。

- (1) 読書に親しむ活動や情報活用の授業を通して他者理解をすすめるとともに、地域や家庭と連携した図書館活動の計画
- (2) 図書館運営の年間計画作成時に学校司書と連携をはかり、教科横断的な活動を学校全体で行っていくための工夫
- (3) 発達段階や校種に適するように「読書センター」や「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動を通して、豊かな心を育ていけるような支援をしていきたい。